

勸進帖



1959.3.1

大目市立猿橋小学校 第五学年乙組

開
世界の
歌

花のさかりも散るは常
うい てんぺんに

かいもなや

源氏の大將

義経も

今はるろうの

身となりぬ

演出指導

中込 勇

第一 幕 (村人登場)

村人A 一待何かね 近頃のあの安宅の関あたくのせま見張りは

林人B あの取調べの、おんじゅうな事 関前せまを通る人はいとむむかしくせつかん

村人C されるそうじや 本当まことにいかめしい待象まちざうがおうぜいで

何の鳥なににあの様ような事ことをするんだぞう
あの様子ようすをみただけでもま全ぜんく
思い出しおもても身みぶるぶるるいいががああるる程ほどじじや

歌(1) 「きかっせ ぎかんせ
二人ふたりな語ことばを聞きいてきた
早くはやく語ことばしてみみままししやれ

深いふかいががはは知しららなないいけけれれど
梶原かぢのらややううむむききわわららととかかののへへつつううい
ででししにに かんかんぞぞままれれて
そうそうががいいくく 鎌倉かまくら殿どのににゆゆたたげげな

村人D へそーむきわうとやらしおかうとかの
悪者あくもののごうつつくくばばりりにに判官はんくわん様さまととも

ああららううおお方かたがが今いまははるるううのの身みととなる
ととははほんほんににおおかかわわいいそうそうじじや
ほんほんととううににおおかかわわいいそうそうじじははごござざいいまませせぬぬか

歌(2) 「きかっせ ぎかんせ
おおいいりりももええなな事こと 聞きいててきた

村人A 梶原かぢのらなんなんじじとと言いうう奴やつはは全ぜんくく犬いぬ友ともししややつ
同然どうぜんじじやや わわししもも武ぶ士しののほほいいくくれ

なりなりはは本ほん当とうににひひととりりええてて首くびのの根ねを
へへししおおつつてて多おほくくににしし ぞぞくくににて
喰くつつててややりりたいたい程ほどじじや

歌(3) 「判官はんくわん様さまはは大だい将しょうのの身みでで山やま伏ふし姿すがたにに身みを
ややつつしし 忠ちゆう義ぎのの侍さむらい四よ人にん連れんれて

村人B ぞとは源氏げんじの大だい将しょう義ぎ経けい殿どのもも山やま伏ふし姿すがた
にに身みををややつつしし ああててななきき旅たびをを続つづける
ととははほんほんにに浮う世よははままままななううぬぬもの
ではではごござざいいまませせぬぬか

全 ぞよ吹ふくく風かぜももささぞぞ冷ひやととうう当あたるるで
ごござざいいままししようよう。

歌(4) 「日本にっぽん国こく中ちゆう津つ々々浦うら々々ままでで判官はんくわん様さまををめめし
ととれれとと おおふふれれががままわわるるてておおかかわわいいそうそうじじや
そうそうかかいい おおひひれれががままわわつつてておおかかわわいいそうそうじじや

村人C なる程ほど それそれででななぞぞががととけけまましたしたな

村人D

全

歌 (5)

村人A

全
村人B

近頃諸々方々に新聞をたて山伏をとりしまる由 昨日もニ入安宅の関で打首となつたぞつじや それが判官様でなければよいが いかにもむごい傍事ではございませぬかなあに判官様はな 武藏坊弁慶といふ強い侍を引連れおるとの事故 どうしてく 安宅の関の青侍に召しとられてなるものが 例え世がさかさまになろうともし 左様な事はございませぬ 関守なんぞ やほのやほ 聞いても あまれる程じや 全くあまれた「あほう」ではございませぬか

判官様は無念の涙 頼りの弁慶したがつて花の安宅につくと云う せうかい御無事のお通り祈ります

こんな事を言うている間に山伏が来た 言いがかりをつけられては大変 ここえこぬ内に早く帰るとしよう ではございませぬか

よかろうか
それでは急いで帰るとしよう

花の安宅

山伏歌につれ金剛杖をつきく入場

幕内の歌

伊勢

亀井

義経
弁慶
義経
弁慶
義経

弁慶

亀井

「いのめ早く明け行けば
まきの宮居のかみがまや
あしの篠原 波こえて
花の安宅に つきにけり」

なれぬ旅故 君にはまやあつかれの
事と存じまする せりては事をしそん
ぶるとはいにしえよりの定とつかま
つります

これにてお休みあわれて行く先々の
心したくをいたしては如何なとつに
ござりませう

(腰を下して) 如何に弁慶

義経

弁慶

義経

弁慶

義経

弁慶

義経

弁慶

義経

何用にござりまする
只今村人の誂せ事を聞かれしか
いや 如何なる事にござりませう
道々に弁慶の申せし如くかく行く
先々に新聞ありて山伏を固くとり
調べる由 いわゆるむつしへは思
とようぬ事 名もなき者に討たれ
んよりはと覚悟はすでに決れども
各々方の所存は如何に
言語道断 是はゆゆしき一大事
先ずは各々方のお心の程を
如何に堅固な安宅の関と申せども
吾等が心中神にも通ずる事 疑う
よちもございませぬ

駿河

伊勢

龜井

伊勢
全

弁慶

歌

義経

一同
弁慶

しがし斯くも大勢の事なる故容易に無事通過できるとは考えられませぬ 斯くなる上は是非に及ぬ人の通わぬ山深く分け入る以外はござりませぬ

如何に不忌儀な駿河殿のお言葉
今更弱音は禁物でござりましよう

これば各等の帯せるこの大刀は一体何の鳥又何時の世に使用する御所存か 君の一大事は今此の時

関所の番卒 切りたおし

唯打破ってお通りなされいッ
あいや暫く 此の関を打破まは易けれども

「吾等が姿 かくれなし
なだ行く先の そのうれい
やませなす身の 心静かに
人月もさくる 関の山」

とにも再にも弁慶よきに計り給え
各々不眠はいうべからず
はは お言葉ごもつともしにござりまする
されど我等面々こそは誠の山伏にも
見えするが君のおん姿こそかく
れなくござりまする 恐れ多し事
なれども御す亦かけをぬがせられ
あの強力のおいたる辰をそつとおわ

義経

歌

(義経誦)

せられ み笠深くめし給いくたが
れたる程にもてなして吾々より後
へ引きさがりなば中の人は思ひま
申すまじと存じまする
さうば一時も早く出発の用意な
致さん

罪なき身にてありながら
人目をしのがやるせなや
いわおに響 滝の音
よせいの無情 つぐるのみ

弁慶

片園

各々方 御心配めされるな 万事
この弁慶の胸に
赤き夕日も早西山に傾き給う
日のとらがりと暮ぬ内 急ぎ出発致
さん

幕内合唱
第一 一 草希 (関所の場)

幕内合唱

「あわれ安宅も近赤きぬ
関の哀山 谷深く
人目の関も遠ければ
浮世しがらみ 程近——」

富樫

斯くいふ某は加賀の国の住人富樫
左エ門さて頼朝 義経御中不和と

臣(A)

富樫

臣(B)(A)

富樫

臣(C)

弁慶

ならせ給うにより判官殿主従山伏となつてむつの国へ下向の由鎌倉殿聞こしめしてかく国々へ新関をたて山伏を固く詮議せよとの教令にまりて某此の関を相守る 各々左様心えてよかろうぞ

仰せの如く吾々君の御前に控えおろし山伏とみるならば即座になわかけ引ますえ申す

いと頼むし言葉なり 仮おも山伏来りなば計り事にてほらなほ鎌倉殿の御心を安んじ申すべし

本だ日も暮れきりぬ折なればなおと表は散重に手落無き相守られよ

はばかじこまつてございまする如何に富樫殿

あれへ大勢の山伏の姿が立ち現われございまする

何々山伏々々山伏とあらは固くとの詮議致してよかろうぞ

こなたと申されよ
こりや それなる山伏殿 おとじま
りなされい 二二は安宅の関守に
ござる

これは... 南都東大寺の建立の
為に客僧を連れて諸国を勧進致す
もの 何れ 関所をお通し下され

富樫

弁慶
富樫

臣(D)
弁慶

臣(A)

弁慶
臣(B)

弁慶

そればしゅうしょうのお心掛ながら
近頃 鎌倉殿よりのおきて山伏に
身をやつす義経殿と疑のある者は
細かく取調べよとの事 殊にこれ
なるは大勢の事なる故一人もお通
し申されぬ

心得ぬ事どしかな? してそのわけは
征夷大將軍 源頼朝、義経の仲
不和となりせ給いざきを申せし如く
判官殿主従山伏となつて、みちのくの
秀衡公をひうを頼り下向ある由
きこしめして各々国々へ新関をもうけ

某もしかとの関守申し受けたり
しかるが故に又とお通し申されぬ
いさい承知いたせしが作り山伏
なればとしかくも誠の山伏をとど

めよとの仰せはよもあるまい
とやかく言う山伏は是非もなや
昨日山伏を三人までお切りすたり
して又その切りたる首は義経殿か

あ、むずかしき問答 例え誠の山
伏とてようしやはならぬ なおし
無理に通らんとせば一命にもかか

わる事
言詰断の事 しかうば気のむく
ままにお取調べなされ

(山伏じゅうしょうをもちむ)

「祈禱」

くまの観言 おんまもり
不勤明王 みそなわせ
吾等はまことの山伏よ
疑う者こそ おろかなれ

臣(心)

高樫

牛慶
富樫

こまぐ、取調べましたが大不思議の
がど更々、ござりませぬ
しからば先刻、南都東大寺の建立
の勧進と仰せありしがそれならは
定めて勧進帖をお持ちの旨、そこ
にて読み上り給え、某ニこにて
聽聞(ききこ) 仕まつらん
何とて、勧進帖を讀めと仰せられるか
如何にも
心得えてござる、しからば――

「それ、つづく、おもんみれば大恩教主
の秋の月にはねはんの雲にかくれ生死無う
夜の長き夢、驚くやまものか
二に人皇、第四十五代聖武天皇は深
ぶつぼうに志し給ひて南都に東大寺を
建立し給うし、しかるにその大がらんも
火災にあい焼亡(やぶ)し、今にかえり
みる者なきをうれえて、この俊業坊証
源頼朝、命を受けて諸国を勧進す
一紙半銭(いっしはんせん)にて、ほうさいの
人はこの世にては無病息災(むびょうそくさい)
家内安全(かないあんぜん)死して未来は極(ごく)不

高樫

牛慶

浄土の蓮花の上に座する事、更々
疑なし、痛命(いたなづな) けい参(けいさん) つつし
みて申(まを)す

勧進帖聽聞の上は疑あるべからず
さりながら事のついでに問ひ申さん
世の仏徒の姿さまぐ、ある中にも
山伏の姿いかめしく、仏門修業(ぶつもんしゅうぎょう)は不思議なる事、これにも
いわれありや、如何に――
おおその由なら、ばいとや、財(ざい)金(きん)の
それは修けん(しゆけん)の志と言ふ、脂藏(じざう)金剛(こんごう)の
両部(りやうぶ)を諳(しん)としけん、がん悪所(がんあくじよ)をふみ
開き世にあんじゆふどんじやをたいじ
して現世愛民(げんせいあいみん)のいつく
しみをたれ、あるいは難業(なんぎょう)苦業(くぎょう)
(なんぎょう)を成仏(じやうぶつ)の功をつみあくれい
ほう(ほう)二んを成仏(じやうぶつ)させ、日月
晴哪(はるかな) 天下(てんか)養平(やうへい)のきとうを修め
内(うち)にはじひの徳を修め表(うら)にゴウま
のせうを現わす、これ、神仏(かみぶつ)の両
部に、して百人(ひゃくにん)のじゆかり、仏道(ぶつだう)の利
を現わす、
して又けさ衣(い)を身にまとい、仏徒(ぶつと)の
なりにありながら、頭にいたたく
どきんは如何(いか)い、
即ち(すなわ)とまん、銚(しやう)かけは、武士(ぶし)の甲冑(かぶつ)フ
にも等(な)しきその、腰(こし)にはみだのりけん

富樫

牛慶

臣(四)

高桎

弁慶

高桎
弁慶

高桎

弁慶

高桎

弁慶
高桎

を帶し手にはしゃかの金剛杖にて大地を
をっけてのみ開き高山せつしよと
いゆらおうす

しからば金剛杖にて五体を固むる

そのいわれはなななんと一
ささ事し愚や金剛杖はしよとん
が苦業の途上に使われしもの
してそれが終けんに伝わりしは

しよとんより代々授けつがれし金剛杖
言わば吾祖先より授かりたる物を
持ち山野とばつしやうし何の不思議
儀があろう

仙門にありながら大刀を帶せる

そのわけは

これぞかかしの弓矢に似たれども
良き人間に害ある物を一さつ他生の
の利によつてたちまち切つて捨
るなり

しからばこれにまといしはじき

はいかに

たいどう黒色のほじきと申す
如何にも純糸(ゆんし)なるお心掛
かかる尊き客僧をしおし疑い申せ
しは目(め)あつて無きが如し

吾は如何にも無念なり今より
勸進のせしめにつかん

ふせ物ただちに持ちまいれ
がしこまつてごがいませる

高桎

弁慶

高桎

義経
高桎

弁慶

わすかなれど東大寺建立の勸進
即ふせ物御受納下エうは某が
くどく一重に頼み承る

お心の程ありがとうございまする
いでく急ぎ出発致さん

待たれよそれなるそはへ続く山伏
おとまりなされい

山伏姿の義経殿
は...何甲でござる
ましがいしなき義経殿この高桎の

ひとみに誤なし御格ごされよ
いかに義経殿と仰せられるか

いかなる事とは言えこの男あるが
故にどこを通るにも義経殿とまち

がわれとかく迷惑のかかる事よ
騒しい世間の折から汝の如きなまじ

色白きはうるさい事とあれ程と
めたのを何でもかでも勸進に出る

のだと聞かすけんじしてこれ迄
来たり歩くとなればくたひれたと
はまくせる汝の爲にはこれ程
やつがいな目にあう事ぞ
腹立たしや

金剛杖をかり上り見ては前主君を
涙ながらに打つ

ミニが勸進帖の登場ですので十分研究しよう

歌 (人目の関)

一 人目の関のやるせなや さくるとも

金剛杖にて打たんとは 神よ照せよ 吾が まこと

ニ まことの関は通るか

心ある身の やかうとて 打つ杖先に 神やどる わが上に まことの神よ

牛度

高極

牛度

高極

早く通らぬ為が故 か様なちんじ
出たぞ致したや いざ立て出発じや
いや いか様に陣おる共 通す事
はまかりならぬ
まだ此の上にも疑あると申されるか
かくなる上は是非に及ばず
この強カめ 荷物もろ共おあずけ
致す いかし これにて打ち殺し
てみせ申(そう)

いざ いさぎよく 覚悟いたせ
あいや暫く 早まり給うな
判官殿にもなき者を疑いてかく
せかんもした物なり 今疑は晴
れたり つかかな不思議なふるま
あつて恐れ入ってござる しかれば
急いでお通りなされい

山伏全 ありがとうござりまする

歌 (山伏の歌)

一 人目の関のやるせなや 浮世なれ

さとられぬこそ 此れなる山水のいわおに御目く
なるは落ちくる 滝の水

ニ いと未申して去らばや去らば

おいて おつと かたにかけ
虎の尾をいみ 毒蛇の口を
逃れ 逃れて 陸奥の国

白川

勸進帖をやつてみて感じた事(心の
軌ま)すぐその場で書いておきましょう